

クリスマスバスケットバザー講演会が開かれました（2026.9.11）

共同通信社記者の津村一史氏（本校 47 期卒業生）をお迎えして、標記講演会が開かれました。

本校のクリスマスバスケットバザーは、物品販売や食事の提供、各文化部による展示やイベントを通じ、支援を必要とする世界中の人々に、少しでも手を差し伸べようとする行事です。今年は 11 月 29 日に実施されます。バザーは生徒全員ではなく希望者が参加して実施されますが、毎年とても多くの生徒がボランティアとして参加し、文化祭や体育祭と並ぶ大切な学校行事と位置づけられています。また本校の理念である、「隣人愛」や「奉仕」の実践の場としても、とても意義深い行事です。

そのバザーへの生徒の関心を高めるため、実行委員会は毎年バザーの前に講演会を開き、講師として社会をより良くするために尽力している方々をお招きしてお話を伺っています。

今回は、学校に近い谷山サザンホールをお借りして講演会を実施しました。まずバザー実行委員長が登壇して実行委員会の活動を紹介し、多くの生徒の参加を呼びかけました。その上で催事担当の実行委員が津村氏を紹介し、「記者の仕事は面白いのか」という演題で講演が始まりました。

津村氏は共同通信社入社以来、様々な現場での取材を体験され、その体験を『中東特派員はシリアで何を見たか』『法王フランシスコの「核なき世界」』『バチカン機密文書と日米開戦』等の著書として発表しています。津村氏はその取材において「記者がなすべき仕事の一つに、「社会的に」声が小さな人、声を上げたくても上げられない人、声を出したいのかもしれない人の思いや、その人たちを取り巻く現状を調べ、広く世の中に伝えるというものがあると考えている。その記者が取材して記事にし、世に問うことをしなかったとしたら、社会はそうした課題があることも認識できず、解決に向けた一歩を踏み出すこともなかった。そう感じられるような報道にこそ、意味があると信じている。」（共同通信社名古屋支局デスク「記者が取材し世に問うこと」https://note.com/kyodonews_osaka/n/n61898d24a075 より引用）という姿勢を貫かれています。今回もその姿勢に沿い、数多くの現場を渡り歩いた記者ならではの臨場感にあふれたお話をしてくださいました。

最初に配属された支局で、トラックから外れたタイヤに直撃されて歩行者が死亡した事故をきっかけに、粘り強い取材の結果、自動車会社の設計ミスや隠蔽などを明らかにしていった先輩から学んだこと。また別の支局で県知事の逮捕に至るような案件を、先輩記者と協力した取材を通じて支局として明らかにできたこと。シリア国内を取材していて村の人々に「この惨状をぜひ国外に伝えてほしい」と強く頼まれたこと。国際調査報道ジャーナリスト連合（ICIJ）の公式メンバーとしてタックスヘイブン（租税回避地）の実態を暴いたパナマ文書報道に参加したこと。同行取材中の機内でローマ教皇に話しかけられ、思いかけず教皇の日本訪問をスクープする流れになったこと。その教皇が原発問題を始めとして「力も地位も持たない人々の、声にならない声を拾い上げて伝えようとしていた」姿勢に感銘を受けたことなど、さまざまな体験談が語られました。そして「事実を掘り起こし、足を使ってこつこつ確認し、原稿を書くという記者の仕事は面白いと思う」と話を締めくくられました。

それらのお話のいずれからも、津村氏の情熱や使命感が伝わりました。津村氏のお話は、記者の仕事の内容説明にとどまらず、人間として使える知恵と力を総動員してなされる仕事の大切さや面白さを伝え、あわせて聴き手がこれから生きていく上で何を大切にすべきなのかを考えるきっかけとなるもので、聴衆一同大いに感銘を受けました。

生徒たちは熱心に聴講し、最後で少しだけ触れられた、同級生の本校教員 M 先生の在学時のエピソードで盛り上がりました。公演後の質疑応答では予定時間で収まりきれないほどとても多くの質問が出され、津村氏はそれに的確かつ誠実に答えられ、とても充実した講演会になりました。

その後、津村氏は当日時間の関係で十分質問に答えられなかった内容につき、ご自分が取材なさった記事を学校にお届けくださいましたので、その記事を各クラスに置いて共有しました。

